

令和 4 年 9 月 12 日現在

機関番号：34326
 研究種目：若手研究
 研究期間：2018～2021
 課題番号：18K13911
 研究課題名（和文）初期近代ローマの新サン・ピエトロ聖堂造営における建築創作手法としての創造的修整

研究課題名（英文）Creative Modifications in the Construction of the New St. Peter's Basilica in Early Modern Rome

研究代表者
 岡北 一孝（Okakita, Ikko）
 京都美術工芸大学・工芸学部・講師

研究者番号：00781080

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：新しいサン・ピエトロ聖堂（以後、新聖堂とする）は、莫大な資金と、数多の優れた芸術家たちの奉仕によって形づくられたキリスト教建築文化を代表する建築である。とりわけ15世紀から17世紀にかけての構想と創作のバトンは、結果的にこのモニュメントの荘厳さと崇高さへとつながったように思える。この壮大な造営事業は、3世紀にわたって新聖堂を建設することと同じ時間をかけて、4世紀創建の由緒ある旧サン・ピエトロ聖堂（以後、旧聖堂とする）をどう弔うかでもあった。それは建築のリノベーションの一種であり、創造的修整（過去の建築を大規模に改変する際にみられる、創造と保存を包括した創作手法）と定義できるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

初期近代における新聖堂の造営事業は、大胆かつ頻りに形状が変化してゆく中にもしっかりと「保存」の概念を組み込んだ、創造的修整の格好の事例であったことを示すことができた。そして、サン・ピエトロ聖堂のような由緒正しき古代末期の建造物を継承しつつ大規模に再建した過程を明らかにしたことで、初期近代ローマの建築保存概念の十全な理解につながったと考えられる。また、保存と破壊と創造の三つ巴こそが、建築創作の隠れた原動力となっていたことを示唆したことは、今日の建築創作における保存と創造の深刻な対立構造という問題を、史的な観点から考察するうえで興味深い事例ともなった。

研究成果の概要（英文）：The new St. Peter's Basilica is the result of an enormous investment of money and skillful work by a number of outstanding artists. It is a representative of Christian architectural culture. The baton of vision and creation of architects from the 15th to the 17th century, in particular, seems to have resulted in the monument's grandeur and sublimity. The project of building St. Peter's Basilica was also how to mourn the old basilica over the same period of time as the construction of the new one. It was a kind of architectural renovation, or to put it another way, a creative modification.

研究分野：西洋建築史

キーワード：ルネサンス バロック サン・ピエトロ聖堂 リノベーション 再利用 創造的修整 聖遺物

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

過去の建築を保存し、次世代に継承することは、もはや当然のこととして議論されている。各国独自の文化財保護に関する法規だけでなく、世界遺産制度のような世界共通の枠組みの中でも、建築の保存はシステム化されている。とりわけ重要な文化財はかたちの絶対的な保存が最優先であり、手が加えられる場合も、保存という行為の一環として、復元や修復と名付けられる。19世紀から議論を重ねてきたその保存システムは、多くの文化財を救ってきた一方で、建築の創作と保存のあいだに大きな溝を生んだ。そして、日本でも多くの近代建築がその深刻な対立のなかで姿を消してきた。なぜなら創造のためには破壊が必要であり、保存のなかには「破壊」が入り込む余地がないと考えられてきたからである。

しかしながら建築史を俯瞰してみると、過去の建物を継承することは、常に物質的な保存と結びついてきたわけではない。例えばアルベルティからブラマンテ、ミケランジェロ、カルロ・マデルノそしてベルニーニまで初期近代イタリアの主要建築家たちが関わった新聖堂の造営事業は、4世紀創建の旧聖堂をかたちの上ではすっかり壊してしまうものであった。しかしながら、現代の建築家像の原点でもある彼らは、建築創作のなかで必然的に生じた保存と破壊の両方に、過去の継承を見ていた。

旧聖堂はほぼ消え失せてしまったために、確かにかたちを保存したとはいえない。したがってこの状況はいまの文化財保護システムでは許されない。しかしスボリアと呼ばれる建築部材の再利用や、新聖堂は旧聖堂が建つ領域をすべて覆うべきだという考え方など、新聖堂の建設は旧聖堂の戦略的かつ選択的保存と並行していた。そのような保存と創造の関係は、近年の研究において積極的に評価され今日の建築保存・修復概念の再検討にもつながっている。

2. 研究の目的

上述の研究背景や探求すべき問いをもとに、15世紀半ばから200年をかけてキリスト教の聖地として歴代の教皇主導で始まった旧聖堂の破壊と新聖堂の建設過程を精査する。コンスタンティヌス帝が創建した聖なるモニュメントの保存・継承と、古代文化の復興を象徴づける偉大な新聖堂の建設という二つの理想をうまく折り合わせた結果が、新聖堂なのである。そしてその一連の建築家による建設過程が、建築の保存と破壊・創造が渾然一体となった創作、すなわち「創造的修整」とも呼べることを3ヶ年の計画で明らかにすることである。創造的修整とは過去の建築を大規模に改変する際にみられる、創造と保存を包括した創作手法を示す概念であり、それは新聖堂建設の重要な設計原理でもあったと考えられる。

新聖堂造営の考察において、もっぱら問題となってきたのは、前人未到の計画を実現するための構造的な解決方法など、建築家のアイデアや着想源であった。つまり歴代の建築家たちが旧聖堂をどのようにとらえ、それをいかに保存しようとしたのかについては追究されてこなかった。しかし旧聖堂の破壊と新聖堂の建設において、建築家たちはそれぞれに旧聖堂の保存と継承を意識していたのである。新聖堂建設にはアルベルティからベルニーニまで15名以上の計画立案者が関わり、注文主である教皇も30人近くにわたった。また持続的かつ長期的な建設期間ゆえに、市民や人文主義者たちの造営に関する意見や心情を綴った資料も多い。つまり本研究は15世紀から17世紀のローマにおいて建築をつくることの内実とその意味を総体的に検討することをも目的とする。

3. 研究の方法

初期近代における新聖堂の建設過程において、アルベルティからベルニーニまでの建築家たちが、旧聖堂というキリスト教で最重要のモニュメントの何を壊し、何を残したのかを逐一整理して記録する。そして彼らの保存・修復と混淆した建築創造への眼差しを明らかにし、初期近代の新聖堂建設が、まさに創造的修整の一事例であったことを示す。以下が、分析のための重要事例であった。

- (A). ニコラウス五世による再建計画を批判し、新聖堂が継承すべき旧聖堂について語った『記憶に残すべきローマの古代のサン・ピエトロ聖堂について』(マッフェオ・ヴェジオ、1455年頃)
- (B). ニコラウス五世による再建計画の詳細を記したジャンノッツォ・マネッティ『ニコラウス五世の伝記』(1455年)
- (C). ブラマンテからベルニーニまでの新サン・ピエトロ聖堂建設の計画案(ウッフイツィ美術館所蔵、1500年代～)
- (D). ブラマンテによる計画案が描かれているカラドッソ制作のサン・ピエトロ聖堂建設記念メダル(1506年)
- (E). 新聖堂建設の主任建築家を務めたペルッツィやアントーニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョー

ヴァネによって記録された旧サン・ピエトロ聖堂の身廊の円柱（1520年・30年代）

- (F). サン・ピエトロ聖堂の破壊と保存の状況を克明に描いたヘームスケルクの素描（1535年頃）
- (G). サン・ピエトロ聖堂建設の様子を描いたG・ヴァザーリ《サン・ピエトロ聖堂建設を監督するパウルス三世》（1546年）
- (H). サン・ピエトロ聖堂で奉職していたティベリオ・アルファラノがあるべきサン・ピエトロ聖堂の姿を図面とテキストで示した『いとも古きサン・ピエトロ聖堂と新たなる建築』（1582年）

例えば、ニコラウス五世が主導し、アルベルティが関わった旧聖堂の再建計画は、(B)を中心に再建復元案が多く制作されてきたが、これまで見過ごされてきた(A)と組み合わせることで、旧聖堂の保存の実際を明らかにできるはずである。またブラマンテの創作手法に関しては、旧聖堂の平面に重ね合わせて描かれた新聖堂のプラン((C)の一部)と、(D)に刻まれた「新聖堂は旧聖堂の復興<instauracio>」であるという一節などから、破壊者と呼ばれたブラマンテによる旧聖堂の継承の意図を明確にする。さらにアルベルティからベルニーニまで一連の建築家が用いた新聖堂における旧聖堂の部材の再利用(スポリア)は、保存と創造をとり結ぶ行為として極めて重要である。特にスポリアについては、これまであまり取り上げられていない(E)を中心に分析する。また旧聖堂の身廊を取り壊し、新しくファサードを設計したカルロ・マデルナの計画案((C)の一部)は、(H)に大きく影響を受けており、マデルノもまた旧聖堂の保存と継承に大きな関心を持っていたと考えられる。

そのほかの資料も、かたちの変遷や介入の実態について、建築の保存・破壊・再利用・付加という観点から整理し、分析していく。その結果、初期近代ローマにおける当代一のモニュメントを創造的修整という観点から包括的に記述できると考える。

4. 研究成果

新型コロナウイルス感染症感染拡大にともない、ヨーロッパでの調査が不可能となり、研究計画は大幅に修正せざるを得なかった。そこで、図面や素描、建築作品といったモノの分析ではなく、本国においても手に入れやすい文献資料を集中的に分析する研究計画へと変更した。この研究計画の変更を念頭に、当初3カ年の計画であった本研究を4年（2021年度まで）とした。

とりわけ中心的な材料となったのは、上記のリストにおけるAとHの史料である。これらに関する研究成果の概要を以下にまとめた。

I. 15世紀の再建事業（アルベルティとブラマンテ）

ローマ教皇ニコラウス五世（在位：1447-55）の構想の実際、および建設の進捗については明確ではないが、史料をもとに、一定の信頼をおける推定復元図が作成されている。それによると外陣の骨格は旧大聖堂ほぼそのまま、側廊壁にそって新たに多くの礼拝堂が設けられている。サン・ピエトロ聖堂はその名の通り、聖ペテロが眠る墓の上に立つ。そして、歴代教皇たちの墓もここにあった。様々なモニュメントが旧聖堂内にはとほろ狭しと並び、ニコラウス五世以降の教皇にとって、自らが眠る場所や記念碑を設置するために十分な場所と礼拝堂が必要とされたのである。一方の内陣は、大幅に拡張した上で、交差部にドームを架ける計画であった。これも典礼機能の充足や、ドームの象徴性によって、聖ペテロが眠る空間をより特別な場所とするために仕組まれたものだった。

サン・ピエトロ聖堂のような霊廟と教会堂が融合したモニュメントの同時代の事例が、アドリア海沿岸の港町リミニのテンピオ・マラテスティアーノの建設、つまり旧サン・フランチェスコ聖堂の改築である。リミニの君主シジスモンド・マラテスタが注文主のこの教会堂に関しては、サン・ピエトロ聖堂の再建にやや先行して始まったこと、ニコラウス五世がシジスモンドによる教会堂改築を認可したこと、アルベルティがその設計に携わるようになった経緯、そして両教会堂のパンテオンとしての類似点などを鑑みて、アルベルティによるサン・ピエトロ聖堂再建の縮小版実験作品であったともいわれる。つまりサン・ピエトロ聖堂もまた、テンピオ・マラテスティアーノのように旧聖堂を包むことでそれを補強し、聖遺物のように取り扱う方針が打ち出されたと考えられ、それは多くの研究者たちによる推定復元案とも矛盾しない。

この計画の基本的な枠組みは、ヴァチカンにおける建築家ブラマンテとユリウス二世（在位：1503-13）による新聖堂造営にも引き継がれたと考えられる。ブラマンテがとりわけ内陣部分の刷新とドーム架構に執念を見せたことや、残された素描U1A、そしてルネサンス期の建築家たちの理想が純粋幾何学にあったことなどを根拠に、ブラマンテの計画案は集中式平面での再建であったと考えられてきた。しかし、別の素描U20Aには、旧聖堂とニコラウス五世によって計画された内陣部分も示されていることや、旧聖堂が立つ部分を新聖堂は覆うべきだとユリウス二世が支持していたことから、ブラマンテの最終決定案は集中式ではなく長堂式であると

いまでは考えられている。

ブラマンテの仕事に、旧聖堂のアプシス部分をすっぽりと覆ったテグリオが挙げられる。これは旧聖堂の最も重要な部分を保護し、その象徴性を高める意図があった。ロレートのサンタ・カーサにある同様の覆屋を設計したのもブラマンテであった。その中に納められた聖遺物は、天使によって運ばれてきたとされる聖母マリアの家である。そうした事例を踏まえると、ブラマンテ聖地あるいは巨大な聖遺物ともいえる旧聖堂を部分的にでもむき出しにしようとはしなかっただろう。実際にブラマンテから聖堂建設の主任建築家の地位を引き継いだラファエッロ・サンツィオの計画案は、旧聖堂を覆い尽くす壮大な長軸式であった。

II. 接木された聖堂：新旧聖堂の並存

その後、新聖堂の完成に多大な貢献をしたミケランジェロは、ブラマンテに立ち返ることを目標にかかげ、とりわけ前任者アントーニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネの仕事に批判し、すでに出来上がっていた部分を取り壊すほどの辣腕をふるった。そこに後継者たちの創意工夫が加わり、16世紀が終わるころには、内陣部分とドームがほぼ完成した。デュペラックが描いたミケランジェロによる新聖堂のプランは、集中式平面であるもののこれで全面的に建て替えられたわけではない。この時のサン・ピエトロ聖堂は、まさに新旧のハイブリッドであった。つまり二つの聖堂が「分離壁」と呼ばれる壁で接することで並存していた。

この壁は1538年、教皇パウルス三世（在位：1534-49）がアントーニオに作らせたもので、新聖堂の工事から旧聖堂を保護する目的があった。教皇たちはそれを教会堂の重要な一部とみなして豪華に飾り付けたといわれており、工事中の単なる仮設建造物という訳ではなかった。つまり、分離壁と旧聖堂の外陣部分は、残されるはずであった。しかしながら、分離壁もろとも旧聖堂を取り壊し、新聖堂を東側に延長させて新たなファサードを建設する計画が実行に移される。1605年、パウルス五世（在位：1605-21）の治世のことである。これは素朴に考えれば、旧聖堂、つまりカトリック教会にとっての最重要モニュメントの破壊である。旧聖堂の決定的な死の局面といえるだろう。

III. 新たな外陣とファサード：ティベリオ・アルファラノからマデルノへ

もちろん旧聖堂の保存と破壊については、当時さまざまな議論があった。旧聖堂の崩壊の危険性は常に指摘されており、安全性の観点から取り壊しが主張される一方で、旧聖堂を残すべきだという声は大きかった。建物そのものの取り壊しが決定した時にも、旧聖堂に由来しそれを記憶する様々な事物のできる限りの保存がパウルス五世に嘆願された。その文書には、新聖堂は旧聖堂の立つ場所すべてを覆う必要がある旨が明記されていた。1571年、ヴァチカンの聖職者であったティベリオ・アルファラノは、「悠久のサン・ピエトロ聖堂の完全な図像」と名付けられた素描を残した。これはデュペラックが描いた平面図（ミケランジェロの計画案）と旧聖堂の平面図を重ね合わせ、アイコンを描き足したものである。その制作意図は、新旧聖堂が分離壁で接合されたハイブリッドな姿への批判であり、新聖堂は旧聖堂を包み込むべきだと主張するために描かれたと考えられている。これは聖堂再建の出発点であるニコラウス五世とアルベルティによっても明確に示されていた方針でもあった。そして実際に、カルロ・マデルノによって作られた新たな外陣とファサードは、旧聖堂の建っていた場所を包むようにつくられた。

教会堂を建て替える場合、古い教会堂の建つ領域を聖なるものとし、そこを新しい教会堂が覆うことは一般的であった。なぜなら、聖なるものに触れた場所はあまねく聖遺物であったからである。さらにサン・ピエトロ聖堂の場合、その地面には多くの教皇が眠っており、聖堂も比類なき神聖なモニュメントであるコンスタンティヌスのバシリカであった。この一連の再建では、旧聖堂を聖遺物、新聖堂を聖遺物容器と見なしていたともいわれる。聖遺物は「部分が全体である」

(*pars pro toto*) と考えられていた。つまり、どんな欠片であっても、全体と等価値であるという考え方があり、物質的な多寡は問題ではなかった。この点、サン・ピエトロ聖堂においては、物質的な保存よりも、象徴的な保存と継承が重要であった。全体的な分量でいえば、ごくわずかであるとしても、旧聖堂の部材はアルベルティからベルニーニにいたるまで、新聖堂の様々な場所で再利用された。

IV. サン・ピエトロ聖堂の生と死

最後にこの再建の過程から、建築の「生」と「死」を考えてみたい。素朴に考えれば、建築の竣工時を生ととらえ、それが取り壊された時をもってそれは死んだといえる。ヨーロッパのモニュメントは、長い時間をかけて、大きく姿かたち変えながら存続しているものが少なくない。サン・ピエトロ聖堂のように、ごくわずかとしかいえないにせよ、旧聖堂の一部が新聖堂にいまも残る以上、それは4世紀の創建から生き続けていると考えるべきだろうか。あるいは、アルベルティが先鞭をつけた設計と施工の分離と、ルネサンス以降の建築家の職能を考えるならば、建築家にとっては、建築を媒介するもの（図面と模型）が完成した時点が建築の生の瞬間であり、マリオ・カルボが論じたように、そのメディウムこそがオリジナルであり、建築がコピーでしかないのであれば、建築の「オリジナル」は、それにもとづく建築が、大胆にかたちを変えられたとしても、取り壊されたとしても、どのような変遷をたどるにしても、永遠の生を持つとも考えうる。しかしながら、ここで考えるべきは、建築をかたちの生成と消滅、あるいは図面がオリジナ

ルなのか、建築がオリジナルなのかという建築家の作家性の問題でもなく、ルネサンス期に盛んに論じられた人間と建築のアナロジーの問題、そしてキリスト教の教義であろう。

初期近代のサン・ピエトロ聖堂の造営事業は、3世紀にわたって新聖堂を建設することと同じ時間をかけて旧聖堂をどう弔うかでもあった。イエスは死に復活した。キリスト教において、イエスの死と復活は教義と信仰の核をなすといってもよいだろう。聖なるモニュメントもまた、象徴的に一度死んで復活することが重要であった。とりわけ対抗宗教改革の流れの中で、サン・ピエトロ聖堂再建の理念と象徴性を主張することは、教皇庁にとってカトリックの興亡をかけた一大事業であった。それは教会の威厳と権力を示すために、旧聖堂を取り壊して壮大で規模が大きな聖堂を建てなければならないという単純な話ではなかったはずだ。それはこれまで述べてきた再建の過程が明らかにしている。どうしても旧聖堂は壊され、一度象徴的にでも死ななければならなかったのだ。そしてそれはまた新たに復活を遂げる必要があった。

最後に、得られた成果のインパクトや新たな知見を示す。一つは、初期近代のサン・ピエトロ聖堂の造営においては、いかに建てるかと同時に、いかにして古い聖堂を壊し弔うかということが大きなテーマであったことを明らかにしたことである。建物を使い続けること、つまり保存や継承を考えたときに、部分的であっても建物を壊すことは避けられない。建築の歴史や保存・修復の実践においては、「いかにして残したのか」焦点を当ててきたが、「どのように壊したのか」を問うことで、建築創作や保存をまた別の側面から見ることができると考えられる。次にもう一つのポイントは、教会堂建築には欠かせない聖遺物、聖遺物容器と聖堂との関係性に着目し、聖遺物容器と聖堂が入れ子構造で互恵関係にあることを考慮することで、教会堂の建設にとって、空間や場所を覆う、包むという行為が極めて重要であったことを指摘したことである。

これら二つの新たな知見が今後の新しい研究の展開につながっている。サン・ピエトロ聖堂の造営事業では巨大な木製模型が制作された。この建築模型に加え、建築的形態をした彫刻・美術工芸品であるマイクロ・アーキテクチャーという造形物が、ルネサンス期における建築創作において大きな役割を担ったということである。これは現在の研究テーマ（ルネサンス期の彫刻家ー建築家による建築創作手法の特質の解明：21K14339）の着想源ともなっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岡北一孝	4. 巻 1
2. 論文標題 建築と美術工芸のあわい：ルネサンスのミニチュア建築	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都美術工芸大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡北一孝	4. 巻 10
2. 論文標題 アルベルティのvarietasとconcinntas：絵画、建築、音楽をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Arts & Media	6. 最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡北一孝	4. 巻 1
2. 論文標題 ルネサンス概念の生成：ヴァサーリからペイターまで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 2019年度日本建築学会大会（北陸）建築歴史・意匠部門 パネルディスカッション資料「再生する近代：19世紀歴史主義の現在性」	6. 最初と最後の頁 32-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡北一孝	4. 巻 10
2. 論文標題 アルベルティのvarietasとconcinntas：絵画、建築、音楽をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Arts & Media	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡北一孝	4. 巻 8
2. 論文標題 ピウス二世『覚え書』の建築エクフラシスと理想都市ピエンツァ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Arts & Media	6. 最初と最後の頁 42-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡北一孝	4. 巻 10
2. 論文標題 『十二世紀ルネサンス』の波及：12世紀ローマの建築と「ルネサンス」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 196-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡北一孝
2. 発表標題 コンキンニタース再考
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡北一孝
2. 発表標題 初期近代西欧の模型を考えるためのいくつかのキーワード
3. 学会等名 日本建築学会「建築と模型」特別研究委員会第4回定例研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡北一孝
2. 発表標題 ルネサンスのMicro-Architecture研究序説
3. 学会等名 科研基盤B「創造的思考の基盤としての建築術」第二回研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡北一孝
2. 発表標題 ルネサンス概念の生成：ヴァサリからペイターまで
3. 学会等名 2019年度日本建築学会大会（北陸）建築歴史・意匠部門 パネルディスカッション（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡北一孝
2. 発表標題 初期近代のサン・ピエトロ聖堂の再建と建築の「生」と「死」
3. 学会等名 日本建築学会 建築論・建築意匠小委員会「建築論の問題群」第5回研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikko Okakita
2. 発表標題 L'ecfrasis nelle teorie della citta; ideale nel Quattrocento Italia: Giannozzo Manetti e Papa Pio II
3. 学会等名 Grand Tour del terzo millennio(VIII edizione) Ricerche di Storia dell'Architettura dei Borsisti e Artisti Stranieri a Roma (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 伊藤 喜彦、頼原 澄子、岡北 一孝、加藤 耕一、黒田 泰介、中島 智章、松本 裕、横手 義洋	4. 発行年 2020年
2. 出版社 彰国社	5. 総ページ数 152
3. 書名 リノベーションからみる西洋建築史	

1. 著者名 木俣元一、松井裕美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 480
3. 書名 古典主義再考 西洋美術史における「古典」の創出	

1. 著者名 池上 俊一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 524
3. 書名 原典 イタリア・ルネサンス芸術論 上	

1. 著者名 布野修司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 972
3. 書名 世界都市史事典	

1. 著者名 伊藤 喜彦、額原 澄子、岡北 一孝、加藤 耕一、黒田 泰介、中島 智章、松本 裕、横手 義洋	4. 発行年 2020年
2. 出版社 彰国社	5. 総ページ数 152
3. 書名 リノベーションからみる西洋建築史	

1. 著者名 松原 康介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 400
3. 書名 地中海を旅する62章	

1. 著者名 ヒロ・ヒライ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 工作舎	5. 総ページ数 280
3. 書名 ルネサンス・バロックのブックガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>岡山県立大学教員紹介 https://gdata.oka-pu.ac.jp/profile/ja.f4c6b453778a9062520e17560c007669.html リサーチマップ https://researchmap.jp/albertiana/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------